

小説『分かれ道の先にあるもの』(配偶者転勤とキャリアの選択)

第0章 プロローグ — 春風の分かれ道 —

三月の終わり、街を包む風はまだ冷たかった。

山下紗希は、営業用の鞆を肩にかけながら、駅前の桜並木を見上げた。

今年も咲き始めたばかりの花が、淡い光に揺れている。

十年勤めた医療機器メーカー。

数字のプレッシャーも、取引先の厳しい要求も、乗り越えてきた。

最近では後輩の育成も任され、ようやく「自分の居場所」ができたと感じ始めた矢先だった。

——夫の転勤が決まった。

「九州支店に異動だって。二か月後には赴任らしい」

そう告げられた夜、食卓の味噌汁はいつもよりも冷たく感じた。

夫の言葉は穏やかだったが、紗希の心には波紋が広がった。

行くべきか、残るべきか。

そのどちらを選んでも、何かを失う気がした。

登場人物紹介

山下 紗希(やました・さき)／33 歳／医療機器メーカー営業職

入社 10 年目。中堅社員として営業現場を支える存在。

顧客との信頼関係を大切に、自分の成長を実感できる仕事に誇りを持っている。

夫の転勤が決まり、キャリアを続けるか同行するかで揺れている。

山下 翔太(やました・しょうた)／34 歳／地方銀行勤務

真面目で誠実な性格。業務成績を評価され、九州支店への転勤を命じられる。

「一緒に来てほしい」と願うが、妻の仕事への想いを完全には理解できていない。

西園 智久(にしぞの・ともひさ)／62 歳／キャリアコンサルタント

地域のキャリア相談室で活動するベテラン相談員。

穏やかな語り口で相談者の思考を整理し、価値観を引き出していく。

紗希が偶然ネットで見つけた無料相談会で出会う。

第1章 夫の転勤内示と動揺

「ねえ、紗希。ちょっと話があるんだ」

夕食を終え、ニュースの音だけが流れるリビング。

夫・翔太が少し硬い表情で切り出した。

その瞬間、紗希の胸に小さな違和感が走る。

「九州支店に異動になった。四月から」

言葉は静かだったが、その響きは生活を一変させるほど重かった。

「九州って……単身赴任になるの？」

紗希は、咄嗟に現実的な質問をしていた。

翔太は一拍おいて、苦笑した。

「できれば一緒に行きたい。せっかくだし、新しい場所で一緒に暮らしたら」

その言葉に、紗希は返事ができなかった。

夫の転勤は珍しいことではない。

だが、自分が積み上げてきた十年のキャリアを――

簡単に置いていけるほど、軽いものでもなかった。

翌朝、通勤電車の窓に映る自分の顔は、どこか他人のようだった。

「行くべきか、残るべきか」

答えのない問いが頭の中をぐるぐると巡る。

会社では、来期の営業方針を共有する会議が開かれていた。

新製品の担当に選ばれたばかりで、部長からの期待も大きい。

後輩の石原が「紗希さん、これ一緒に回ります？」と声をかけてくる。

いつものように「うん」と答えたが、声に張りがなかった。

「どうしたんです？　なんか元気ないですね」

「ううん、ちょっと考えごと」

石原は首をかしげたが、それ以上は聞かなかった。

紗希は心の中で、彼女の気遣いに感謝した。

同時に――「誰にも言えないこと」がひとつ増えた気がした。

その夜、寝室の灯りを落としたあとも、眠れなかった。

夫の寝息が隣で規則的に響く。

その音を聞きながら、心の中でつぶやく。

——私の人生、どうなるんだろう。

仕事を辞めて同行することもできる。
けれど、再就職先が見つかる保証はない。
今のように自分を必要としてくれる職場に出会えるかもわからない。

一方で、東京に残れば、夫とは離れて暮らすことになる。
「結婚してまで別々に暮らすなんて」と、周りにどう言われるだろう。
そして何より、夫は寂しがらるだろう。

どちらを選んでも、何かを失う——
そう思うと、息苦しさに胸が締めつけられた。

週末、紗希は実家の母に電話をした。
「お母さん、もし私が九州に行くことになったら……」
言いかけたところで、母は察したようだった。
「翔太さんの転勤？ あら、急ねえ」
「うん……仕事、どうしようか迷ってて」
「そうねえ……あなた、仕事好きだものね」

その一言に、涙が込み上げた。
母はいつも、仕事より結婚を優先しなさいと言っていた人だ。
でも、今は違う声で言ってくれた。

「焦らず考えたらいいんじゃない？ どっちを選んでも、紗希の人生なんだから」

電話を切ったあと、窓の外に目をやると、
夜の街に春の雨がしとしとと降り始めていた。

雨音の中で、紗希は思った。
——誰かに、話を聞いてもらいたい。
仕事のことも、夫のことも、そして「自分がどうしたいのか」も。

その小さな願いが、後に彼女をキャリア相談室へと導くことになる。

第2章 キャリア面談での行き詰まり

昼休みの終わり、紗希は人事部からのメールを開いた。

件名は「キャリア面談のお知らせ」。

異動や昇進の希望を聞く定期面談だったが、今回は胸の奥がざわつく。

夫の転勤を知ってからというもの、会社の制度や自分の立場を考える時間が増えた。

会議室のドアをノックすると、人事課の佐野主任が笑顔で迎えた。

「山下さん、お忙しいところありがとうございます。最近どうですか？」

いつもの柔らかな声。

だが今日は、その言葉にうまく笑顔が返せなかった。

「実は、夫の転勤が決まりまして……九州に」

「そうでしたか。それは大変ですね」

佐野は少し表情を曇らせ、書類を閉じた。

「会社としては、営業職の地方勤務は今のところ本社・関東圏中心なんです。

転勤制度が整っていないくて……」

「リモートでできる仕事もありますが、やはり顧客対応が中心ですからね」

紗希は静かにうなずいた。

「そうですよね……」

沈黙。

佐野が続けた。

「もし退職ということになっても、再雇用制度があります。戻ってきたいときには、またご相談を」

その瞬間、胸の中にひやりとした風が吹いた。

「戻る」——その言葉が、なぜか遠い未来の話のように聞こえた。

面談を終えたあと、紗希は社内カフェに立ち寄った。

窓際の席でコーヒーを手にしながら、行き交う社員たちをぼんやりと眺める。

「再雇用」なんて、いまはまだ考えたくない。

やっと自分のペースで仕事ができるようになったのに。

それに、後輩たちも成長してきて、チームがようやくひとつになりかけている。

——この場所で、もう少し頑張りたい。

そう思う一方で、夫との生活が頭をよぎる。

一緒に暮らせなくなることへの寂しさ。
周囲の「普通の夫婦」のように、支え合いたいという気持ち。

そのどちらも嘘ではない。
だからこそ、答えが出ない。

夜、自宅に戻ると、翔太はパソコンで転職先の物件を調べていた。
「ねえ、この部屋、会社から近くて家賃も手頃なんだって」
楽しげな声。
紗希は微笑もうとしたが、口角が上がらない。

「いいね……」とだけ言って、キッチンに立った。
包丁を握る手が震えていた。
心の奥で、かすかな怒りのようなものが渦巻いていた。
——どうして、私の気持ちは誰も聞いてくれないの？

翌日、同僚の石原が声をかけてきた。
「山下さん、最近ちょっと疲れてませんか？」
紗希は笑ってごまかした。
「大丈夫、ちょっと考えることがあって」

けれどその笑顔の裏で、心はもう限界に近かった。
「会社に残るべきか」「夫に同行すべきか」
どちらを選んでも、正解はない。

そんなある日、偶然スマホで見かけた広告が目に残った。
——「無料キャリア相談会 あなたの“これから”を一緒に考えます」

気がつくと、紗希はそのページを開いていた。
「キャリアコンサルタント・西園智久」
優しい笑顔の写真がそこにあった。

予約ボタンに指を伸ばしながら、胸の奥で小さくつぶやく。
——もう少し、自分を信じてみたい。

第3章 キャリアコンサルタントとの出会い

休日の午前、紗希はカフェの奥の席で、手帳を開いていた。

そのページには、「キャリア相談会・13:00～」と書かれている。
少し早く着きすぎたかもしれない。
窓の外では、通りを行き交う人々の姿が春の光に滲んでいた。

仕事でもないのにスーツを着てきた自分に、思わず苦笑する。
何を話せばいいのかも、正直よくわからない。
でも、このまま誰にも話さなければ、心が折れてしまいそうだった。

会場の「地域キャリア相談室」は、市役所の一角にあった。
案内の職員に名前を伝え、ほどなくして年配の男性が現れた。

「山下さんですね。どうぞ、こちらへ」

穏やかな声。
名札には「西園 智久」と書かれていた。

白髪まじりの髪、落ち着いた目元。
そのまなざしに不思議と安心感を覚えた。
小さな相談室のテーブルに向かい合って座ると、
西園はまず、ゆっくりと深呼吸を促した。

「少し緊張されていますか？」
「……はい。こういうの、初めてなので」
「大丈夫ですよ。今日は“正しい答え”を探す日ではなくて、
山下さんが“今、どんな気持ちでいるのか”を一緒に見ていく時間です」

その言葉に、肩の力がふっと抜けた。

しばらくして、紗希は話し始めた。
夫の転勤のこと、会社の制度、そして仕事への想い。
言葉にしてみると、胸の奥のもやが少しずつ形をとっていきようだった。

「……どちらを選んでも、失うものがある気がして」
「なるほど。失いたくないものが、いくつかあるようですね」

西園はゆっくりとうなずきながら言った。
「それは“何”ですか？」

紗希は少し考えてから答えた。

「……この仕事で築いてきた信頼関係。

お客様やチームとの関わり。

それに、自分が“誰かの役に立っている”という実感です」

「仕事の中で、自分が生きている感覚を感じてこられたんですね」

「……はい」

しばらく沈黙が流れた。

西園はメモを取ることもなく、ただ目を合わせてうなずいていた。

「一方で、夫との生活も大切にしたい。

“どちらかを取る”というより、両方を大切にしたい——

そんなお気持ちでしょうか」

「……そうですね。できるなら、両立したいです」

「“両立”という言葉の奥には、どんな想いがあるでしょう？」

その問いに、紗希は息をのんだ。

思えば誰からも、そんな風に聞かれたことがなかった。

「……一緒に頑張りたい、というか……。

どちらかが我慢して成り立つ関係じゃなくて、

お互いが納得できる形を見つけないんです」

「素晴らしいですね。

“お互いが納得できる形”を探す——それが、

山下さんにとっての“答え”の方向かもしれませんね」

西園の言葉に、紗希の目に涙がにじんだ。

何かを決めたわけではない。

けれど、自分の中に確かな軸があることに気づいた瞬間だった。

面談を終える頃、西園は静かに言った。

「今日のところは、答えを出さなくても大丈夫です。

でも、山下さんの中に“何を大切にしたいのか”という芽が見えました。

その芽を、これからどう育てていくか——

そこを一緒に考えていきましょう」

紗希はうなずいた。

外に出ると、春の風が頬をなでた。

空は少し霞がかかっているが、どこか優しい色をしていた。

——少しだけ、前に進めた気がする。

その日、紗希は久しぶりに深く眠れた。

第4章 「仕事」と「生活」の本音を語る夜

夕食を終えたあと、リビングには静かな時間が流れていた。

テレビの音が小さく響き、夫の翔太は缶ビールを手に、ぼんやりとニュースを眺めている。

紗希はキッチンで食器を片づけながら、何度も息を整えた。

話そう。

今日こそ、ちゃんと。

リモート勤務の打診も、再雇用の説明も、会社の制度では難しいと分かった。

けれど、それ以上に——心の中で整理できたことがあった。

「自分が何を大切にしたいか」

その答えを、翔太にも伝えたかった。

「翔太、少し話してもいい？」

呼びかけると、翔太はテレビの音量を下げ、姿勢を正した。

紗希の表情に、いつもと違う真剣さを感じ取ったのだろう。

「この前の転職のことだけど……」

言葉を選びながら、紗希はゆっくり話し始めた。

「正直、まだ答えが出ていない。でも、ひとつだけわかったことがあるの。

私、やっぱりこの仕事が好きなんだ」

翔太は少し驚いたように目を見開いた。

「うん、分かってるよ。紗希は仕事熱心だから」

「そういう意味じゃなくてね……」

紗希は小さく首を振った。

「仕事があるから、私、自分でいられる気がするの。

お客さんに信頼してもらえたり、後輩が成長していくのを見たり、
そういう瞬間が、私にとって生きてる実感なんだと思う」

翔太は黙って聞いていた。
紗希の声は震えていたが、目はまっすぐだった。

「でも、翔太のことも大事。
一緒に過ごす時間をなくしたくない。
だから、どちらかを切り捨てるんじゃなくて、
お互いに無理のない形を考えたいの」

「……たとえば？」
「たとえば、しばらくは別々に暮らしてみるとか。
休みを合わせて行き来するとか。
そういう工夫をして、まずは続けてみたい」

翔太は少し考えてから、ゆっくり息を吐いた。
「正直、寂しいと思う。
でも、紗希が“無理してついてきた”って思うような生活も嫌だ」

その言葉に、紗希の胸がじんわりと熱くなった。
翔太は続けた。
「俺も、九州で落ち着いたら転勤のない部署を希望してみるよ。
時間はかかるかもしれないけど、
お互いのキャリアを大事にするって、そういうことなんだろう？」

紗希は静かにうなずいた。
「うん……ありがとう」

夜風が窓を揺らす音の中で、二人はしばらく黙っていた。
テレビも消え、部屋には互いの呼吸だけが残った。

「ねえ、紗希」
翔太が小さく呟いた。
「“どっちかを我慢しない”って、難しいけどいい言葉だな」
「キャリア相談で言われたの。“どちらかを選ぶ”じゃなくて、“どちらも大切にする形を探す”
って」

その言葉を口にした瞬間、
紗希は自分の中で、何かが確かに動き出したのを感じた。
決断とは、選び捨てることなく、
自分の価値観を軸に立ち上がること。

春の夜、窓の外では風が柔らかく吹き抜けていた。
二人の間にも、小さな安堵が灯ったようだった。

第5章 決断とその後

四月の終わり、桜の花びらが歩道を薄い絨毯のように覆っていた。
山下紗希は、会社の屋上庭園に立っていた。
いつもの昼休み——けれど今日は、少し特別な日だ。

人事部へ「異動・退職の意向なし」の届出を提出してきた。
つまり、彼女は東京に残ることを選んだ。

決断に至るまで、何度も迷った。
夫の笑顔や、静かな夜の食卓。
それらを思い出すたびに、胸が痛んだ。
けれど、あの夜、翔太と語り合ってから、
“自分が何を大切にしたいか”が少しずつ輪郭を持ちはじめた。

夫も理解を示してくれた。
「最初の一年は単身でやってみるよ。
行った先でも生活を整えて、もし環境が落ち着いたら
また話し合おう」
その言葉に、紗希は心の奥で静かにうなずいた。
「ありがとう。私も、こっちでできる限り頑張る」

互いの未来を、どちらも手放さない選択。
それは不安も伴うけれど、誠実な決断だった。

昼下がり、チームの後輩・石原が駆け寄ってきた。
「山下さん、今月の契約目標、達成しましたよ！」
その声に、紗希は思わず笑みをこぼした。
「本当？ よく頑張ったね」

報告書を一緒に確認しながら、ふと気づく。
この仕事の中で、自分はいつのまにか
“支える側”にもなっていた。
後輩を育て、顧客を支え、チームを支える。
それが、自分の新しい「役割」なのかもしれない。

かつての自分は「働くこと」だけに価値を見出していた。
けれど今は、仕事を通して“つながり”を感じることに意味を見いだしている。
西園との面談で芽生えた“両立”という言葉が、
少しずつ現実の形をとりはじめていた。

夕方、ビルを出ると、空は少し霞がかかっていた。
スマートフォンに翔太からのメッセージが届く。

「新しい職場、なんとかやってる。週末、オンラインで顔見よう」

紗希は笑みを浮かべ、返信を打った。

「うん、こっちも元気。お互い、ちゃんと生きてるね」

その言葉に、自分でも少し驚いた。
“ちゃんと生きてる”——そう、彼女はいま、自分の意志で立っている。
選ばなかった道への後悔よりも、
自分の足で選んだ道への誇りのほうが、ずっと強い。

春の風が髪を揺らす。
遠くで子どもの笑い声が聞こえた。

——きっと、この先も迷うことはある。
けれど、もう恐くはない。

そう思いながら、紗希は歩き出した。

「どちらも大切にしたい」
その言葉を胸に、彼女の新しい季節が始まろうとしていた。

— 終わり —

Stories on the way.

巻末付録

キャリア理論による整理

1. Super のライフスパン・ライフスペース理論

夫の転職という「生活上の変化」を前に、紗希は「職業人」と「配偶者」という二つの役割の間で揺れていた。

この理論は、人生を多様な役割の組み合わせとして捉え、「今の自分はどの役割を重視したいか」を整理する手がかりとなる。

紗希の場合、「職業人としての成長」と「家庭人としての支え合い」をどう両立させるかを考える場面で有効だった。

2. Schein のキャリア・アンカー理論

紗希の葛藤の背景には、「仕事を通して成長したい」「誰かの役に立ちたい」という価値観がある。

この理論は、人がキャリア上で譲れない“内なる軸(アンカー)”を明らかにするもので、紗希の場合は「専門能力」と「自律性」、そして「ライフスタイル志向」のバランスが彼女の決断の基盤となった。

3. Schlossberg の転機理論(4S モデル)

転職という「予期された転機」に直面した紗希に対し、カウンセラーの西園は、状況(Situation)・自己(Self)・支援(Support)・戦略(Strategy)の 4 つの視点で適応資源を整理した。

とくに「夫との関係」や「職場の同僚」「母の助言」などの支援資源を再認識することで、彼女は“ひとりではない”という安心感を得ていった。

4. Gelatt の意思決定理論

「どちらを選んでも正解がない」という状況で、西園は「不確実な中でも、より良い可能性を選ぶ」という考えを伝えた。

この理論は、完全な情報がない中での現実的な意思決定を支援するものであり、紗希が“夫の同行か仕事の継続か”を二択ではなく、“両立という第三の道”として捉え直す助けとなった。

キャリアコンサルタントの関わり方

1. 支援ポイント

- ・「正しい答え」ではなく「大切にしたい価値」に焦点を当てた。
- ・“両立”という本人の価値観を言語化し、自律的な意思決定を促した。
- ・配偶者との対話を支援することで、自己理解から関係性理解へと広げた。

2. 支援者としての留意点

- ・転職・育児・介護など「ライフイベントとキャリアの交差点」において、支援者は二項対立（続ける／辞める）を超えた選択肢を提示することが大切。
- ・意思決定支援では、感情・価値・現実の3層を整理し、納得感のある結論を導くプロセスが求められる。

あとがき

配偶者の転職に伴うキャリアの選択——。

それは、誰かの命令や制度だけで割り切れるものではなく、
人の心の深い部分に関わる問題です。

今回描いた山下紗希の物語では、「どちらかを選ぶ」ことよりも、
「何を大切に生きていきたいのか」を探すプロセスそのものに焦点をあてました。
転職・結婚・出産・介護など、人生の節目で訪れる“転機”は、
誰にとっても避けられない現実です。
しかし、そのとき人は「キャリアをどう続けるか」という問いだけでなく、
「自分がどう在りたいか」という、より根源的な問いに直面します。

キャリアコンサルタントの西園が示したように、
支援者の役割は、クライアントに“正しい答え”を教えることではありません。
むしろ、迷いの中にある本人の中から「大切にしたいもの」を引き出し、
それをもとに自分らしい選択をつくっていけるよう支えること——
そこにこそ、キャリア支援の本質があります。

紗希は「仕事」と「生活」という二項対立の中で、
“両方を大切にしたい”という自分の価値を見つけました。
その決断は、世間の常識や制度に照らせば「中途半端」に映るかもしれませんが、
けれど、キャリアの本質は“社会の枠組み”ではなく、
“自分が納得できる生き方”を積み重ねていくことにあります。

本作を通して、読者の方にも——
「自分が大切にしているものは何か」
「それを守りながら生きるには、どんな選択があるか」
そんな問いを、静かに心の中でめぐらせていただけたなら幸いです。

季節が巡っても、
自分の心に吹く風を信じて歩く人たちへ。

2025 年秋 筆者

小説『分かれ道の先にあるもの』(配偶者転職とキャリアの選択)

© 2025 caritabito.com

All rights reserved. 無断転載・複製・引用を禁じます。